

J1 - A

二〇一三年度 入学試験問題
一般第一回・帰国児童入試

国語

注 意

- 1 問題は 一・二 の二題あります。
- 2 試験時間は五〇分です。
- 3 答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 4 受験番号は算用数字で記入してください。
- 5 声を出して読むはいけません。
- 6 試験場の先生の指示があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

君は普段どのように言葉を利用しているだろうか？

言葉を使えるお陰で君はタイクツを紛らすことができるし、人を好きになることができるし、未知のものを知ることができる。それだけではない。言葉の使い方によっては、人を救うこともできるし、元気にすることもできる。逆に人を騙したり、怯えさせたり、セツボウさせたり、殺したりもできる。もちろん、言葉の代わりにナイフを使って人を殺すこともできるし、筋肉を使って人を励ますこともできるが、ナイフで歴史を語ることはできないし、筋肉で嘘をつくことはできない。A ここで質問。文明や国家や歴史も作ってしまいう言葉に、よく似ているものがあるとすれば、それは何だろうか？ ヒントをあげよう。君がふだんよく使っていて、もつとたくさんあればいいな、と思っているものだ。

答えは、お金。そう、言葉はお金に似ている。B、こんな類似点がある。お金があれば、もてない男ももてるようになる。言葉をうまく使えば、もてない男ももてるようになる。お金を使えば、醜い女も美しくなる。醜い女も言葉を変えれば、美しくなる。お金を払えば、罪を犯しても、罰を受けずに済む。罪を犯しても、言葉で言い逃れをすることができる。

お金も言葉もその人の本性を隠してしまうのだ。悪人も、お金の力や言葉の魔術で、ゼンニンに化けられる。人間は、お金と言葉を、そういうものとして使ってきたのだ。

お金はそれ自体、ただの紙だが、何かと交換することで無限の価値を生む。言葉はそれ自体、ただの音や記号だが、誰かと話すことで無限の価値を生む。お金も言葉も、その価値はたえず変わり続ける。お金も言葉も、価値が下がったり、上がったたりするが、それは交換されることで価値を生むものだからだ。C、この二つのものは実体も本質も持たない。いつも関係の中で自分を作りかえるものなのだ。場所や時間によって、価格が変わるように、言葉も相手や場所で意味やニュアンスが変わる。

場所が変われば、お金も言葉もその土地独自のものになる点も似ている。ア

アメリカでは英語を話し、ドルを使う。英語もドルも世界中で使える共通のお金であり、言葉だ。一方、インドではヒンディー語を始めた皆さんの言葉と、ルビーというお金を使っている。ドルのように何処でも使える強いお金があれば、ルビーのようにインド以外ではあまり使えない弱いお金もある。それと同じで、英語は何処でも通じるが、ヒンディー語となると、そうはいかない。

君に知ってもらいたいのは、お金も言葉もその都度、交換価値が決められるということだ。英語のように交換価値が高い言葉は強い言葉ということになる。お金の強さと言葉の強さは深い関係がある。母親から習った言葉が弱い言葉だと、狭い世界でしか通じないので、その人は強い言葉を学ばなければ、広い世界に出て行けない。日本はどうだろう。日本円はなかなか強いお金だし、日本語は昔に較べると、ずっと通じやすくなった。D、そのことに甘えてはいけない。お金や言葉が強くなると、人は傲慢になり、自己満足に陥る。あまり、強いお金と言葉の力に頼りすぎると、自分が本来持っていた能力を失ってしまうばかりか、弱いお金や言葉を見下すようになってしまう。

もう一度いおう。お金と言葉は君の本質や実体を見えにくくし、幻想ばかりを募らせる。お金や言葉に騙されてはならない。

どんなところに行っても、お金と言葉は人々を社会と結びつける役目をしている。私たちは、いやでもお金と言葉にかかりを持たされている。君たちが将来、何らかの仕事につくとして、お金や言葉と全く関係のない仕事があるだろうか？ 政治家も弁護士も、教師も銀行員も、小説家もジャーナリストも、軍人も機械工も、あらゆる仕事で言葉をめぐってなされる。政策も法律も教科書も他人を納得させるための言葉で書かれるし、為替や株も言葉の情報で上がったたり、下がったりするし、小説も報道も言葉で作られた物語だし、作戦も取扱説明書も言葉でできている。職業というのは言葉の使い方や分類できるものだ。たとえば、哲学の言葉は誰にでもわかるというものではない。それこそ外国語を学ぶように哲学用語を学ばなければ、カントやマルクスの話は通じない。機械音痴の人はいくら、コンピューターの専門用語を使っても通じない。

人はそれぞれの分野で言葉の専門家になっている。そして、特定の情報を独占して、お金を稼いでいる。政治家同士の密約、法律の複雑な解釈、市場の値動きの変化、特ダネ、とっておきのテーマ、秘密作戦、特許などはどれも言葉の形で取引される商品だ。

君がここで知っておくべきなのは、言葉は社会の中で商品のように扱われているということだ。人は誰しも多かれ少なかれ、言葉売って生きて行くものなのだ。

言葉はお金と同じように、ものと交換される。百二十四払って、缶ジュースを買うように、愛という言葉と愛しさを交換している。缶ジュースには本当に百二十四の価値があるのはわからない。愛という言葉と愛しさは同じ価値があるのかもわからない。ただ、缶ジュースに百二十四という値段をつけることと、愛しさに愛という言葉を買って当てることは、どちらも命がけの飛躍なのである。

もう少し判りやすいおう。

公園に一匹の犬がいるでしょう。私がそれを指差して、これは鯨だ、といったら、君はおかしいと思うだろう。鯨は海の生き物だから、公園にはいない、と。次に私が、ああそうか、それならこれはモグラだ、といったら、君は私が冗談をいつているか、さもなければ、頭がおかしいと思うだろう。そして、君は、これは犬ですよ、と教えてくれたでしょう。今度は私が、君はおかしい、という番だ。なぜ、それが犬でなければならぬのか、別にゴリラであってもいいではないか。もともと、犬という言葉とその生き物はまるっきり別なものだから。

君は私を殴りたくなるかもしれないが、もう少し我慢しなさい。私がいいたいのは、言葉と実体は決して一致することはない、ということ。言葉は言葉、物は物でそっぽを向き合っている。だが、それでは社会が成立しないから、とりあえず、人によくなくつく四脚の舌が長く、鼻がよく利く生き物を犬と名づけましょうというような約束事を無数に作った。そして、その約束事に従わない

人を仲間はずれにしようとしたのだ。その約束事を教えるのが、国語教育であり、外国語教育である。今、私が君に語っているのは、言葉とは何か、に対する一つの考え方だ。同じ約束事の中で、言葉を交わしているあいだは気楽なものだ。友達同士で趣味の話や好きな男の子や女の子の話をしている時には、命がけという感じはしないだろう。けれども、自分の常識が通じない相手とのコミュニケーションは、時に命がけだ。言葉と物の結びつき方は相手や場所によって変わってくるからだ。

アメリカに留学していた日本人の学生が、ハロウィーンの前、平凡な市民に射殺された事件があった。留学生は仮装して、友人の家のパーティに向かっていった。たまたま、家を間違え、他人の家に入ろうとした彼を強盗と勘違いした男が自分の家族を守ろうと、銃を構え、フリーズ（動くな）といった。留学生は敵意がないことを示そうとして、男に近づき、撃たれた。撃った男は正当防衛が認められた。フリーズという言葉とそれに対応する動作の食い違いがこの悲劇の背景にあると思えば、全く、コミュニケーションというものは命がけだ。近頃、巷ではよく物騒な言葉を耳にする。むかついたり、キレたりは日常的で、死ね、だの、殺す、だのと軽々しくいう連中が増えている。彼らは、コミュニケーションは命がけだということを全くわかっていないのだと思う。言葉もお金と同様インフレを起こすから、近頃は、死ぬ、とか、殺す、といった言葉が軽くなってしまったのだろう。しかし、そういう言葉を不用意に使うと、そのとばかりが思わぬ形で自分に降りかかってくることを忘れてはならない。

⑤い。風は吹きつばなしということはない。雨は降りつばなしということはない。風は何処かで誰かのスカートをめくっているかもしれないし、勢いよく風車を回しているかもしれない。雨は何処かで誰かの恨みを買うか、大喜びさせているかもしれないし、地面の奥深くに溜まり、巡りめぐって誰かの喉を潤しているかもしれない。言葉は風や雨と同様、環境を作る要素だ。風が木の枝をゆするようになり、雨が草の生長を促すように、どんな些細な言葉も他人の意識に働きかけているからだ。

問六 傍線部③について。「言葉を当てはめること」は、どのような点が「飛躍」と言えるのですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手が意図したとおりに受け取るはずだと思って、ある実体に即した正確な言葉を当てはめる点。
- イ 同じ価値があるのかもわからず、決して一致することはない実体に、ある言葉を当てはめる点。
- ウ 言葉の当てはめ方が相手や場所によって変化し、自分の常識が通じなくなつて、命がけになるという点。
- エ ある実体に言葉を当てはめながら、約束事を無数に作り、すべての人をそれに従わせようとする点。

問七 傍線部④について。「言葉」が「インフレを起こす」とは、「死ぬ」「殺す」などの言葉の場合にはどうなることですか。原因もふくめて説明しなさい。

問八 傍線部⑤について。「風」や「雨」は何をたとえていますか、答えなさい。

問九 二重傍線部について。「言葉」と「お金」の共通点について、文中に述べられていないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 社会の中で商品として扱われている点。
- イ 人々を社会と結びつける点。
- ウ 実体と決して一致することがない点。
- エ 人間の本性を隠してしまう点。
- オ 交換されることで価値を生む点。

たとえば、君が誰かに向かって、死ね、といったとする。その言葉は相手の意識の底に雨のように溜まり、やがて、それが恨みや憎しみと一緒にたまって、君のもとに返ってくるかもしれない。少なくとも、自分が用いた言葉が相手の意識にどう作用するか、想像してみること。

(島田雅彦「国語・外国語」)

問一 傍線部イホについて。カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

- 問二 空欄 A D に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。
- ア でも イ もともと ウ やはり
 - エ では オ たとえば

問三 波線部 a c の中から、他と異なる働きのあるもの一つを選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部①「交換価値が高い言葉」とはどういう言葉ですか。解答欄の形式に合うように、文中から十字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線部②「言葉売って生きて行く」の説明となっている一続きの二文を文中から探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。ただし、句読点も字数に数えるものとします。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

一月も半ばになり、暖かな日が何日か続いた。梨畑から続く長い坂道を、わたしは散歩していた。夕方の所在ない時間に、とりとめもなく散歩していた。どこからか煙の匂いがする。

「ねえ」という声がうしろから聞こえた。

え、と振り向くと、えび男くんだった。

「A」

薄闇の中を、坂の下からえび男くんのほつてくる。

ひさしぶり。そんなようなことを口の中でつぶやいて、わたしは坂の途中でえび男くんと向かいあった。こうやって外で立って話をするのは、初めてかもしれない。えび男くんの背が少し伸びたように感じられた。

「B」

えび男くんはわたしと並んだ。わたしの手を取って坂の上へと引っ張ってゆく。

しばらく来なかったのね。そう言うと、えび男くんは、

「まあね」と答えた。

「ちょっとね、お父さんとお母さんの間でとりこみごとがあったの」

大人びた口調である。もともとこどもこととしたところは少なかったのだが、

「とりこみごと」という言葉の発音はかんぜんに大人の口調だった。思わずえび男くんを見た。①

えび男くんの顔だった。顔は、子供のものだった。

「元気だった？」 関連な様子でえび男くんが訊ねる。

元気だったわよ。でもえび男くんが来なくて、ちょっとつまなかった。答えると、えび男くんは喉の奥でかすかに笑い声をたてた。

坂をのぼりきったところにある空き地で、大きな火が焚かれていた。はぜる音がして、二、三十人ほどの大人や子供が焚き火を囲んでいる。木の枝に

桃色や緑色の丸い餅を刺したものを火にかざしている人もいる。

「*」

「どんど焼きだね」えび男くんが言った。

よく知ってるね、どんど焼きなんて。

わたしたちのところまではまわって来なかった。

「あのさ、熱いっていう感じをかたみにすると、どんなかたになると思う」

火をみつめながら、えび男くんがふと聞いた。

かたねえ。かたち。やっぱ、火かなあ。

「ぼくはね、熱いっていうのは、手を天に向かって差し上げてる太ったおじいさんみたいなかたちだと思う」

ふうん。それはなんだかおもしろいね。

「別におもしろくないけどさ。じゃね、寒いっていうかたちは？」

寒い、ね。寒いね、星みたいなものかなあ。

「ぼくの寒いね、小さくて青い色の空き瓶だよ」

えび男くんは言って、わたしの手を握りほくようにしてから、焚き火に背を向けた。えび男くんのうなじはあいかわらずたよりなかった。そのうなじをもたげ、空を見る。わたしも同じようにして顔を空に向けた。シリウスが白く

光っている。ほかの星は炎の明るさに打ち消されて、よく見えない。

そうやってしばらく立っていると、うしろから、

「そら」と声をかけられた。

「そら、あんたら、これあげるよ」

振り向くと、みかんを両手に持った人がいた。

「こんなはじっこにいちや、餅はまわってこないだろう、腹も減るし、そら」

言いながら、みかんをえび男くんとわたしの手におしこむ。二個ずつおしこむ。

「ありがとう」③

えび男くんは目をみはっている。目をみはりながら、深い声で

礼を言った。

「ありがとう」もう一度、えび男くんは繰り返した。

なんともいえない声だった。

みかんをくれた人は、笑いながらえび男くんの頭を撫でた。

「いい子だ」そう言いながら、撫でた。

しばらく「いい子だいい子だ」と言いながらえび男くんの頭を撫でてから、

その人は炎に近いほうに歩み去った。

「小さいころ、お父さんの田舎に連れて行ってもらったときにね」えび男くんは、わたしの手を握ったまま言った。

「C」

ほんとにひさしぶり。チョコウエハース、しけっちゃった。言うと、えび男くんは今度は声を出して笑った。

「また買っておいで。行くから」

もう大丈夫なの、その、とりこみごと。聞くと、えび男くんはわずかに頷いた。

そう、大丈夫なの。よかった。

「ほんとね、大丈夫じゃないんだけど」しばらくして、えび男くんが小さな声で言った。火が大きな音ではせている。

「ぼく」さらに小さな声である。

「ちょっとのあいだ」子供の声に戻っている。

②

「ニンゲンフシンになってみてんだ」

焚き火を囲む人たちの顔が橙色に輝いていた。火をみつめる人たちの表情は、どれも同じように見えた。口をわずかに開け、目を細め、嬉しいような

悲しいような、どちらでもあるような表情なのだった。たぶんわたしもえび男くんも同じ表情で焚き火をみつめているのだろう。

「でももうやめたよ」えび男くんはつないだ手に少し力をこめた。

「だって、ニンゲンフシンで、かなしいばかりでいやなんだもん」

わたしも、手に力を入れた。しばらくそのまま力を入れていた。木に刺した餅が焼けると、見物人の間に枝がまわされた。餅を一個ずつ取っては、まわす。

しかしわたしたちのところにはまわって来る前に、餅はなくなってしまった。

「残念」えび男くんが言った。

「でもほんととはあまりおいしくないんだよ、あれ」

そうだね、味もついてないしね。

えび男くんの顔も、橙色に輝いている。紙やお飾りが火のなかに投げこまれ、

そのたびに炎が大きく燃え上がった。何回も木の枝はまわされ、しかし一回も

炎が少しずつ小さくなっていく。いつの間にか人の数が減っている。さきほどみかんをくれた人は、炎を囲む人たちに紛れて、見分けがつかなくなっていた。

「みかんだねえ」えび男くんが言った。

「二個もあるよ」

わたしはえび男くんの肩をぽんと叩いた。

えび男くんもわたしの肩をぽんと叩いた。つまさき立ちになって、ぽんぽん

ぽんと三回、叩き返した。

坂を下りながら、わたしたちはふたたび空を見上げていた。

「あ、リゲル」えび男くんがつぶやいた。

よく知ってるね。言うと、えび男くんは「口」を指したように、

「こないだお母さんと二人でプラネタリウムに行ったんだ」と答えた。

しばらく黙って歩いた。焚き火のはぜる音が遠ざかる。音がすっかり聞こえ

なくなったころ、えび男くんが、

「みかんって、どんな感じをかたちにしたものなんだろう」と言った。

みかんねえ。

「みかんって、ひやひやするね」

見ると、えび男くんは、二つのみかんをズボンの両ポケットに入れているの

だった。

「足までひやひやが伝わってくるよ」そう言って、ズボンの上からそっとみかんを撫でる。だいにだいに、撫でる。

みかんはね、おいしいっていう感じをかたちにしたんだと思う。

「それじゃそのままじゃない」

④

「そうだね、そうかもね」少ししてからえび男くんは言い、みかんを一つポケットから取り出して、皮を剥いた。半分に割り、筋も取らずにそのまま口にほ

うりこんだ。

三つ星がよく光ってるね。言う、えび男くんはみかんを口に入れたままのくぐもった声で、

「あのね。星は、寒いをかたちにしたものじゃないと、ぼくは思うな」と答えた。

ふうん、とわたしが言う、えび男くんは、

「星はね、あったかいよ」とつぶやいた。

「星の光は昔の光でしょ。昔の光はあったかいよ、きつと」と言いながら、えび男くんは鼻をくすんと言わせた。

なぜ？ と聞くと、

「違うよ、少し泣いてるんだよ」えび男くんは答えた。

昔の光は、あったかいのか。わたしが言う、

「昔の光はあったかいよ、きつと」えび男くんは繰り返した。

ハンケチ、使う？ 聞くとえび男くんは、

「いい」と、ことわった。それから、自分のズボンからちり紙を出してちゃんと鼻をかみ、

⑤「昔の光はあったかいけど、今はもうないものの光でしょ。いくら昔の光が届いてもその光は終わった光なんだ。だから、ぼく泣いたのさ」と、しっかりと声で言った。

わたしがえび男くんの手を握ると、えび男くんも握り返した。それからえび男くんは、小さな声で、「むかしのひかりいまいず」と歌いはじめた。

えび男くんにあわせてわたしも、「むかしのひかり」とショウワした。歌いながら、二人並んで坂道を下った。ゆっくりと下った。

三つ星とリゲルが、遙か彼方^{はるか}でまたたいている。

(川上弘美「星の光は昔の光」)

(注) *どんど焼き……一月一五日に、門松やしめなわなどを集めて燃やす行事。

ア えび男くんの大人びた言葉の使い方が、ずいぶんまいきなように思われたから。

イ えび男くんがその言葉を十分に理解していて、それに距離を置いていると感じ取れたから。

ウ えび男くんがその言葉の本当の意味を、実はまったく理解していないようだったから。

エ えび男くんの発した言葉があまりに子供らしくなかったので、違和感をおぼえたから。

問五 傍線部③「えび男くんは目をみはっている」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問六 空欄④に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア でも少なくとも、みかんはひやひやしてないと思うな。

イ だってせっかくなさき、人からもらったみかんなんだから。

ウ そのままのこともあるよ、そういうこともあるよ。

エ あったかくておいしいのかな、なんかそんな感じ。

問七 傍線部⑤について。えび男くんは星の「光」に託^{たく}して、どのようなことが言いたかったと考えられますか。説明しなさい。

問一 傍線部イ・ニについて。カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 空欄A、Cに当てはまる会話を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 会うの、ひさしぶりだよ

イ 焚き火だよ、行ってみようよ

ウ ねえ、焚き火の匂いだよ

問三 傍線部①「えび男くんの顔だった」とはどういう意味ですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大人びた顔になつてはいたが、子供らしいあどけなさも残っていた。

イ 微妙に変化しているが、以前と変わらないえび男くんの顔だった。

ウ まるで別人のような顔をしていたが、やはりえび男くん本人だった。

エ 顔は以前見たときと変わりはない、えび男くんそのものだった。

問四 傍線部②について。「ニンゲンフシン」とカタカナで表されているのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

受験番号
氏 名



得 点

小 計

—

問一	イ	口	ハ	ます	二	ホ	らせる
問二	A	B	C	D			
問三							
問四							
問五	最初						
問六							
問七							
問八							
問九							

最初

最後

言葉。

小 計

二

問一	イ	れて	口	れた	ハ	二	
問二	A	B	C				
問三							
問四							
問五							
問六							
問七							